英語科　授業づくり講座　No.２
【授業研究会】　６月１１日　南国市立香南中学校

発行
令和元年
８月５日
中部教育事務所

授業者　T1 笠井由加里教諭、　T2 北 裕子教諭
T3 豊永信子主幹教諭、ALT Ms. Cherish Warden
（南国市立香南中学校）

単元　第１学年　英語　PROGRAM 3
「ウッド先生がやってきた」開隆堂

単元計画（全９時間　８／９時間目）
第１次　目標の設定⇒基礎的な知識･技能の習得
　単元ゴールを理解し、学習の概要をつかむ。
第２次　目標実現のための言語活動⇒言語活動の見直し
第３次　目標実現のための言語活動⇒振り返り
「読み手を意識して書く」（本時）
パフォーマンステスト

準備物
フィードバック・シート
ワークシート
語順カード　等

目的・場面・状況をクリアにすることで、自分で考えて動ける生徒が増えてきました。

CAN-DO リスト形式の学習到達目標：関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて正確に書くことができる。
単元目標：文字や符号を識別し、語と語のつながりや区切りに注意して正しく書くことができるようにする。関心のある事柄について、正しい語順を意識したり、適切な語句を用いたりして書くことができるようにする。

授業の概要

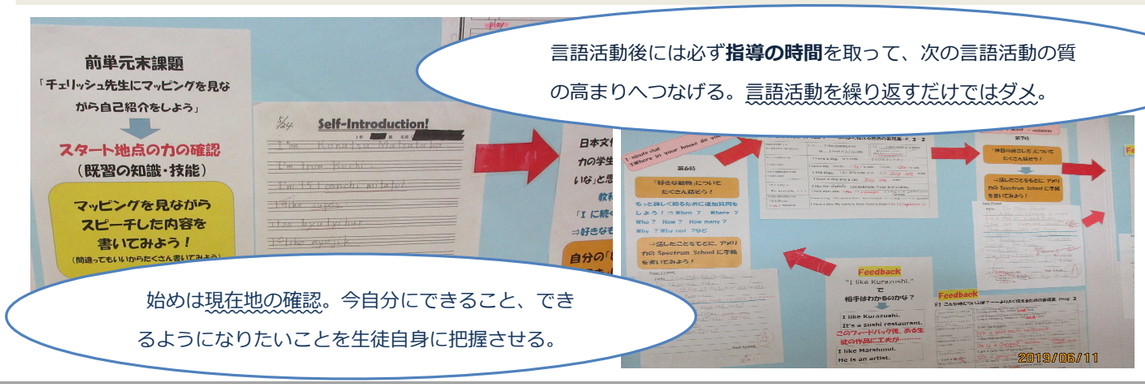
教材研究会（5/28）で出された「場面設定がクリアになればなるほど生徒は考える。」という言葉を大切に ALT の協力も得て場面設定を練り直すことで、生徒が見方・考え方を働かせ、より成長させながら、正確に書くことの資質・能力を育成することができる単元計画、授業の実現を目指した。

授業研究会（6/11）では、前時に書いた生徒の英文からフィードバックを行い、ミスや学ばせたい表現などを共有した後、「Spectrum School の生徒へ、私たちのことに興味をもってもらえる自己紹介文を書こう」という課題のもと、まずは互いが考えた文について伝え合い、参観者からの助言も参考にさせながら、話した内容を英文で書いた。シェアリングを行った後、再度加筆修正し、読み手に伝わるように正しく書くことを目指した。

本時の展開

活動内容	指導上の留意点
1　フィードバック 前時に書いた生徒の英文からフィードバックを行う。	本時の言語活動に活かすために、前時に書いた生徒の英文から、共通したミス、便利な表現、相手意識をもたせるポイントなどを共有する。
2　Activity 1 ①マッピングを行う。　②ペアで伝え合う。 ③参観者に伝える。←コメントを頂く。 マッピングに加筆する。	伝えたいことを短時間で整理させ、相手に話すことで伝えたい内容のヒントを得たり、内容を増やしたり、深めたりする（先に英文を書かない）。 質問された内容に関しては付け加えるよう伝える。
3　Activity 2　話したことを基に書く。 中間評価 書きたくても書けなかった表現を全体で考える。 再考・加筆修正を行う。	参考にしたい友達の表現、全体で考えた表現も取り入れて書くよう促す。生徒の表現例と本日の課題とを照らし合わせ、「興味をもってもらえる自己紹介文」とはどういう文なのかを全体で考え深め、再構築させる。
4　振り返り 参考にしたい文を共有する。 本時の評価規準を基に振り返る。	全体共有したい文章を発表させ、価値づける。

言語活動と指導を繰り返して資質･能力を育成する　～現在地→指導→言語活動→指導→言語活動･･･～



言語活動後には必ず**指導の時間**を取って、次の言語活動の質の高まりへつなげる。言語活動を繰り返すだけではダメ。

始めは現在地の確認。今自分にできること、できるようになりたいことを生徒自身に把握させる。

授　業　づ　く　り　の　ポ　イ　ン　ト

《小中連携》現中１は、小学校で 85～105 時間（小５で 35 時間、小６で 50～70 時間）、言語使用の場面設定の中で英語を使用し、自分自身で気付いたり考えたりしながら、たくさんの語彙や表現に慣れ親しむという外国語の学習を行ってきている。つまり、中学校外国語は、外国語教育の入門期ではないということを踏まえたうえで、小学校の指導内容と指導方法を円滑に接続するとともに、小学校での既習表現を想起させながら系統性を意識した授業改善を進めていくことが求められる。

《見方･考え方の育成＝目的･場面･状況が明確であることが不可欠》

外国語によるコミュニケーションにおける見方･考え方･･･外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること。

生徒が思考･判断して見方・考え方を働かせながら表現することのできる言語活動を仕組むだけでなく、継続的な指導を行うからこそ生徒に力が付いてくる。言語活動後に『その表現は読み手（聞き手）によりよく伝わるのか、理解してもらえるのか』を友達と考えたり、指導者が繰り返し問いかけたりすることで、次第に相手意識をもって、生徒が自分で判断してどういう表現をすればいいのか考えることができるようになる。

I like King and Prince. They're cool.

But, do American students know them？

Well, I like King and Prince. They're singers and dancers.They're cool.

《正確性》

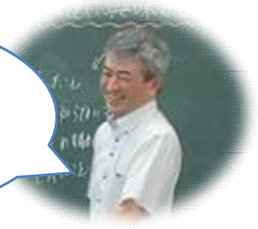
生徒のやる気が高まっている時は書く量に表れ、正確性は量の後にやってくる。まずは書こうとする生徒の意欲に火を付けること。教師がミスについて説明をするのではなく、生徒の発話や解答を例に（要配慮）、生徒自身に気付かせ、考えさせることを大切にしたい。

On Sunday play baseball.
（日曜日は野球をします。）

（語順カードを示しながら）
Who plays baseball？

I play baseball on Sunday.

まとめ

①ゴールで何ができるようになればいいのかを明確にする。
②見方･考え方を成長させることのできる言語活動を設定する。
（コミュニケーションを行う目的･場面･状況を明確にする。）
③言語活動と指導のサイクルを繰り返し行なう。

言語活動と指導のサイクルを高知の定番に！
授業づくり講座での学びを**実践してほしい。**
（文科省　山田誠志
教科調査官）